

“Death in the Woods”におけるモダニズム

園田 健二

シャーウッド・アンダソンの“Death in the Woods”はアンダソン 57 歳の時の作品で、この短編は 1933 年の *Death in the Woods and Other Stories* に収録されている。この短編をアンダソンは数回書き直しているが、この短編は従来アンダソンの作品の中で最もいい作品の 1 つと考えられ、従って、彼の最もいい面が集約されているので、彼の文学的傾向を知るには恰好の作品である。

“Death in the Woods”のテーマは人間のあくことのない動物的な飢えであり、人間の獣的側面である。この短編には人間よりは動物に対して普通使われる“feed”ということばが幾度となく出てくるが、この短編の最後でもアンダソンは次のように述べている。¹

The woman who died was one destined to feed animal life. Anyway that is all she ever did. She was feeding animal life before she was born, as a child, as a young woman working on the farm of the German, after she married, when she grew old, and when she died. She fed animal life in cows, in chickens, in pigs, in horses, in dogs, in men. (p. 423)

また、この短編の別の箇所では次のようにも述べられていて、人間が馬や、牛や、豚や、犬と同列に取り扱われているし、人間の動物性に焦点が当てられている。

Starve, eh? Well, things had to be

fed. Men had to be fed, and the horses that weren't any good but maybe could be traded off, and the poor thin cow that hadn't any milk for three months.

Horses, cows, pigs, dogs, men. (p. 416)

アンダソンがこのようなテーマの短編を物語るのに用いた手法はモダニズムと言われる手法であった。モダニズムはおおまかに言って、文体面、形式面、時間の扱い方の 3 つの側面で特徴があり、以下これらが“Death in the Woods”でどう扱われているかみてみよう。

まず文体だが、アンダソンの文体は複雑な、多音節の語からではなく、簡単な、日常的な語から成っている。“Death in the Woods”の冒頭は次のような文で始まる。

She was an old woman and lived on a farm near the town in which I lived. All country and small-town people have seen such old women, but no one knows much about them. Such an old woman comes into town driving an old worn-out horse or she comes afoot carrying a basket. She may own a few hens and have eggs to sell. She brings them in a basket and takes them to a grocer. There she trades them in. She gets some salt pork and some beans. Then she gets a pound or two of sugar and some flour.

長大医短紀要 3 : 21-26, 1989

長崎大学医療技術短期大学部 一般教育

これをたとえばヘンリー・ジェイムズの文体と比較すればアンダソンの文体がいかに簡明かが分かるであろう。次はヘンリー・ジェイムズの短編, “The Beast in the Jungle”の書き出しの部分である。²

What determined the speech that startled him in the course of their encounter scarcely matters, being probably but some words spoken by himself quite without intention——spoken as they lingered and slowly moved together after their renewal of acquaintance. He had been conveyed by friends an hour or two before to the house at which she was staying; the party of visitors at the other house, of whom he was one, and thanks to whom it was his theory, as always, that he was lost in the crowd, had been invited over to luncheon. There had been after luncheon much dispersal, all in the interest of the original motive, a view of Weatherend itself and the fine things, intrinsic features, pictures, heirlooms, treasures of all the arts that made the place almost famous....

アンダソンの簡明な文体は一方では彼の文学的考えから生まれたものではあるが、他方では彼自身が限られた語彙しか知らなかったということにもよる。彼は後年次のように語っている。³

...My own limited vocabulary was small. I had no Latin and no Greek, no French. When I wanted to arrive at anything like delicate shades of meaning in my writing I had to do it with my own very limited vocabulary.

...There was the language of the factories and warehouses where I had worked, of laborers' rooming houses,

the saloons, the farms.

It is my own language, limited as it is. I will have to learn to work with it.

いずれにしてもアンダソンの文体は彼が描く田舎町の人々に合致しているということであり、ヘンリー・ジェイムズの文体は彼が描く複雑な、洗練された人々を描くのにふさわしいということである。“Death in the Woods”に出てくる人物は実名さえ書いてない老婆であり、また彼女と同様におよそ教養とは縁遠い彼女の夫や息子であり、素朴な中西部の田舎町の人々である。これらの人々が実際にどうしたことばを使っているかは、この短編が“私”という語り手の口を通してしか語られていないので間接的にしか分からない。しかし、“私”という語り手が語る簡単なことばは彼らの飾り気のない行動を巧みに描いているようである。

モダニズムの第2の特色である形式面にふれてみよう。モダニズムでは一般的に言って内容よりも形式に重点がおかれる。ここで内容というのは主にプロットのことである。“Death in the Woods”のプロットは極めて簡単である。というよりか明白なプロットはないという方がより正確かもしれない。ある雪の降る冬の午後1人の老婆が自分の家の鶏が産んだ卵を持って町に出かけて行く。卵は町の食料品店で肉や砂糖やコーヒーなどと交換するためである。老婆は町で犬のための肉を含めて必要な品物を手に入れる。冬の日はず早く暮れようとしていて、老婆は早く家に帰り着くために、近道をして森を通して帰ろうとする。老婆の後には犬が何匹かついてくる。森の空き地で老婆は一休みする。休んでいるうちに老婆はいつしか眠ってしまう。1日か2日後老婆はたまたま森にやって来た猟師に死んでいるところを発見される。猟師は町の人々に老婆の死を伝え、町の人々がやって来る。老婆は犬に着物をはぎ取られ、老婆がかついでいた犬の肉は犬に噛みとられ、老

婆の周囲の雪の空き地には犬が走り回った跡が残っている。以上がこの短編のプロットであるが、この短編に限らず、アンダソンの作品は全般的にプロット性は希薄である。またプロットの組み立て方が従来の方法とは異なる。このことは *Winesburg, Ohio* 中の “Paper Pills” などという短編をみると一層はっきりする。従来のストーリーに従えば結論は最後に来るはずであるがこの短編では最初のところに既に結論と思われるものが書いてある。すなわち、しらがのあごひげをし、手と鼻が大きくて、ワインズバーグの家を疲れ切ったような馬に乗って回っている老いた医者が、金持ちで、背の高い美人の娘と結婚をし、そして彼女は結婚して1年以内に死んだということが早くも冒頭に書いてある。そのあとでこの医者が紙切れに頭に浮かんだことを書き留めてその紙切れを丸めて捨てる癖があるなどということを含め、医者全般の描写や、まだ結婚前のこの娘がどういうふうに別の男との関係で妊娠し、困って医者のところにやって来たかなど、娘と医者が結婚するに至った経緯が書いてある。従来のやり方でいけば、医者との結婚や娘の死亡などはストーリーの最後に来るところであろう。また、この短編でもそれほど大した事件や人物間の葛藤やドラマティックな事件も起こらず、プロット性は比較的希薄である。

そこで、アンダソンの作品にプロットらしいプロットがみあたらないのは偶然か、あるいは故意に行われたかという問題であるが、もちろん彼は故意にこうしたのである。アンダソンが考えた理由は人の人生そのものにプロットなどないからというのがその理由であった。彼が1925年、ドライサーの短編集、*Free and Other Stories* の序文でブレット・ハートやオー・ヘンリーではなく、ドライサーへの強い共感を述べたのもドライサーがプロットなどの技巧をあまり弄しない作家であるためであった。アンダソンはその序文のなかで

次のように述べている。⁴

Theodore Dreiser is a man who, with the passage of time, is bound to loom larger and larger in the awakening aesthetic consciousness of America. Among all of our prose writers he is one of the few men of whom it may be said that he has always been an honest workman, always impersonal, never a trickster. Read this book of Dreiser's *Free and Other Stories*, and then compare it with a book of short stories, say by Bret Harte or O. Henry. The tradition of trick writing began early among us in America and has flowered here like some strange fungus growth. Every one knows there are no plot short stories in life itself and yet the tradition of American short story writing has been built almost entirely upon the plot idea. Human nature, the strange little whims, tragedies and comedies of life itself, have everywhere been sacrificed to the need of plot and one reads the ordinary plot story of the magazines with a kind of growing wonder. “Is there no comedy, no tragedy, no irony in life itself? If it is there why do not our writers find it out and set it forth? Why these everlasting falsehoods, this ever-present bag of tricks?”

一般的に言って文学様式の中であまりプロットがないものは詩であり、叙情詩であろう。“Death in the Woods”はそういう意味で詩であり、叙情詩であると言えるが、こういう観点からこの短編を少しみてみよう。

エドガー・アラン・ポウは“The Philosophy of Composition”の中で詩が詩であるための要素をいくつかあげているが、その中に “melancholy”(=sadness)と “the death of a

beautiful woman”をあげている。まず sadnessだが、“Death in the Woods”の老婆は実に悲しい宿命をせおった女性であり、作者の母親の投影であると言われている。この短編は彼女を主人公にした悲哀の物語である。また the death of a beautiful woman について言えば、主人公の老婆はもちろん a beautiful woman ではないが、語り手の“私”は雪の中で死んでいる老婆を見て非常に感動する。

Neither of us had ever seen a woman's body before. It may have been the snow, clinging to the frozen flesh, that made it look so white and lovely, so like marble. (p. 422)

また“私”は別の箇所“A thing so complete has its own beauty.”(p.424)とも言っている。“Death in the Woods”を詩的にしているその他の要素として雪や森や老婆が死んでいる森の木立の間から見える晴れた寒い冬空やその空を横切っていく白い雲の断片があげられよう。

それではアンダソンがより重点を置いたと思われるこの短編の形式はどうなっているだろうか。この短編は短いながらも5部に分かれている。第1部では中西部の田舎町の周辺には名もない老婆が住んでいて、卵と必要な品物を交換しによく町にやって来たということや、主人公の老婆の夫や息子の行状がよくなくていかに町の人間に嫌われたかということや、夫の父親のこと、いかにして昔ドイツ人と喧嘩して2人が結婚したか、などが書かれている。第2部では結婚後主人公がいかに1人で家の面倒をみなければならなかったか、いかに夫と息子の仕事がうまくいかなかったか、また、老婆が町へ出て卵と交換に必要な品物を手に入れる様子、などが書かれている。第3部では老婆が袋をかついて家路をたどり始めるところから始まり、森の空き地で老婆が眠ってしまい、老婆について来た犬たちが老

婆が持っている袋のなかの犬用の肉をかぎつけて、眠っている老婆の周囲に集まって来る様子などが書かれている。第4部では老婆の周囲に集まって来た犬たちがいよいよ老婆に飛びかかり、老婆を林間の空き地の真ん中に引きずりだし、老婆が持っていた袋にいかにかかっていたか、猟師が老婆の死体を発見して町に通報し、“私”と“私”の兄を含めて町の人々が森へ行き、着物が引き裂かれて裸になっている老婆の死体を見たことが書かれている。第5部では町の人々が死体を町の葬儀屋のところに運び、死体の身元が確認されたこと、などが書かれている。“Death in the Woods”ではこの各部がクライマックスとなる森の中での老婆の死へと漸次収斂していくようになっている。そしてこの構造は小説というよりか詩の構造である。

モダニズムの第3の特徴としてプロットと密接な関係があるが、時間の扱い方の問題がある。時間的に古いものから新しいものへと順次述べるそれまでの手法に対して、モダニズムの作家たちがやろうとしたのはそういう順序にとらわれない自由な時間の設定である。さきにみた“Paper Pills”も、女が医者と結婚して、女は1年以内に死んだというふうに時間的に新しい出来事が先に述べられ、それから時間的に古い、結婚に至るまでのことなどが書いてある。“Death in the Woods”でこの問題を見てみよう。

“Death in the Woods”ではまず冒頭で、主人公の老婆は“私”が住んでいる町の近くの農場に住んでいたという話から始まる。彼女の名前はGrimesで町から4マイル行った小さな入江の土手にあるペンキを塗っていない家に夫と一人の息子と一緒に住んでいる。この夫も息子もしたたかな人間で息子はまだ22であるがすでに1回刑務所に入ったことがあり、夫の方は馬泥棒をしているという噂がある。こういうふうに夫と息子のかんばしくない話があと少し続いた後、時間は更に過

去に戻り、夫や老婆の若い頃に話がさかのぼる。

夫の名前は Jake Grimes で家はかって裕福であった。彼の父親の John Grimes は製材所を所有していたが酒と女性問題のために死んだときはあまり財産は残っていなかった。Jake はその残りの財産を使い果たしてしまい、まもなく材木も土地も殆どなくなってしまう。Jake は妻をドイツ人のところからもらったが、このことがあった時には彼はドイツ人のところに小麦の収穫で働きに来ていた。後に Jake の妻になる老婆も当時はまだ若くて、ドイツ人のところに年季奉公に来ていた。彼女は自分の父親や母親がどこにいるのかさえ知らないような身の上であった。雇い主のドイツ人は彼女に対して何かたくらみがあって彼女をものにする機会をうかがっていた。一方 Jake の方も彼女をものにしようと考えていて、ドイツ人との間で彼女をめぐる喧嘩になった。悶着の結果は Jake が勝ち、彼女は Jake のものとなった。

ここでストーリーは更に一昔前の Jake と彼女が結婚した頃の話が続く。彼女はほっそりした体つきで結婚して3年か4年し子供が2人生まると腰が曲がってしまった。Jake は何かを盗んでいない時は馬の売買をしていたし、3、4頭の豚や1頭の牛も飼っていたが彼はあまりそれらの面倒はみなかった。彼は人の信用もなく、遠くまで仕事をしに行かなければならなかったし、猟をしたり薪を切ったりしていた。やがて息子も成長したが、まったくの父親似のろくでなしであった。父親は息子と外で酔っぱらって帰って来たりしていた。2人は家のことはほおって外を出歩いている。家のことはすべて彼女がしなければならず、彼女にはいつしか何を言われても黙っている癖がついてしまった。彼女は誰も知り合いはいなかったし、町の人も誰も彼女は知らなかった。

ストーリーはここでやっと現在（実際の文

体は過去形）に戻り、ある冬の日老婆が犬を連れて、卵を少し持って町に出かける話が始まる。彼女が家を出た時は午後3時も過ぎていて、雪も盛んに降っていた。彼女はここ数日調子が良くなく、あまり着物もきらず、肩をかがめてぶつぶつぶやきながら町にやって来た。老婆は穀物を入れる古い袋を持ち、中には別の品物と交換するための卵を入れていた。冬には卵の値段が上がった。彼女は町に着き、必要な物を手に入れる。それから肉屋のところに行き、肝臓と犬にやる肉をもらう。

こうして老婆は家路につく。後では犬が彼女が背中にかついでいる重い袋のにおいをかかっている。町のはずれで彼女は袋をかっ掴いまま垣根を越える。こうしたのも丘の上の近道を通り、森を通って行くためであった。老婆は普通の道を通って行くこともできたが、そうすると1マイル遠くなった。老婆は急ぎながらもふと以前あった息子の出来事を思い出す。息子は15マイル離れた郡庁所在地の悪女と恋愛沙汰を起こしていた。ある夏のこと息子は家にこの女を連れてきていた。2人は酒を飲み、母親を奴隷のようにこき使った。何があっても母親は何一つ言わなかった。息子と女は夜は夫婦のように寝ていたが母親は全然驚かなかった。彼女はもう何事にも驚かなくなっていた。老婆は野原を通り、深い雪の中を歩いて行き、森に入る。森の空き地で老婆は背負っていた袋を木の根元に置き、いつしか眠り込む。1日か2日後老婆の死体が発見される。

“Death in the Woods”での時間の流れは以上のように現在（過去）の時間の流れの中に突然それ以前の出来事が錯綜してきたりしてやや複雑である。こういう時間の設定の仕方もプロットの場合と同様に意図的なものであった。時間の設定はプロットと密接な関係があるということを考えればこれも当然のことである。

(注)

1. Horace Gregory, ed., *The Portable Sherwood Anderson*. 1972. Tennessee: Kingsport Press, 1977. 以下, “Death in the Woods”からの引用は同書からによる。
2. George McMichael, gen. ed., *Concise Anthology of American Literature* (New York: Macmillan, 1985), p. 1363.
3. Welford Dunaway Taylor, *Sherwood Anderson* (New York: Frederick Ungar, 1977), p. 40.
4. Jack Saltzman, David D. Anderson, K. Ohashi, eds., *Sherwood Anderson: The Writer at his Craft* (New York: Paul P. Apple, 1979), p. 3.

(1989年12月28日受理)